

隈府小だより

学校教育目標「自ら考え なかまと高め合う 隈府小
～ 明日が楽しみな学校をめざして ～」

隈府小学校
学校だより No.26
文責 芹川博文
11月13日（金）

マンガのもつ可能性の大きさ

～ 今や日本文化の一つ 根底に流れる熱い思いと願い ～





漫画家、ちばてつやの訃報を耳にして思い出したのは、「あしたのジョー」でした。私の記憶では、中学３年の頃テレビで毎週放映されており、「真っ白な灰になるまで」を、友達と様々な場面で、冗談も含めてよく口にしていました。今思い返して感じるのは、ストーリー全体に流れる貧しさの中での人の強さや温かさ。新聞記事から、彼自身の戦争体験に基づく平和への願いがあったと知り、納得しました。

日本のマンガやアニメは、今や世界中に広がり、日本を代表するサブカルチャーとも言えます。私が日本人学校（中東のカタール）にいた時、ショッピングモールで外国の人から言われました。「お前本当に日本人か？日本人に会ったのは初めてだ。でも、なんで日本人がここにいるんだ？見てみろ。車も、電気製品も、ゲームも、マンガも日本のモノだらけだ。日本はすごく小さい国だが、優れたモノをこんなに作り続ける素晴らしい国じゃないか。なぜ、わざわざ出稼ぎに来る必要があるのか？」確かに店には、ドラゴンボールやワンピース、スラムダンク、ナルトなど、日本のマンガや、ジブリのDVDが、英語やアラビア語表記でずらりと並んでいました。

隈府小の図書室にも、手塚治虫、藤子不二雄、赤塚不二夫などのマンガがあります。司書の末永先生に聞くと、スラムダンクやキテレツ大百科に根強い人気があるとのこと。ちなみに私も今、「手塚治虫からの伝言」シリーズを借りて読んでいます。平和や愛、ロボットとの共存などをテーマにした内容に、時代を捉えた突きつけを感じます。その根底にある熱い思いと願いも。

ちなみにワンピースの作者 尾田栄一郎は熊本出身、スラムダンクの作者 井上雄彦も大学時代を熊本で過ごしています。高森高校には全国初となるマンガ学科もあります。マンガを身近に感じ、その奥深さと可能性の大きさを知ると同時に、マンガに限らず様々なモノの可能性を感じます。

好きなことを、とことん追求する没頭力、「好きを育み、得意を伸ばす」時代の風を感じます。

「忘れ物」をしない工夫と 自律へのチャンス

～ 子育て四訓から考える「手を離して 目を離さない」時期 ～

今年度も何度か、登校した後に忘れ物に気づき、慌てて取りに帰ろうとする児童を止めたことがあります。交通事故に遭うリスクが最も高まる状況の一つであり、「忘れ物をしても取りに帰らない」「自分で忘れ物をしない工夫をする」ことについて、先生方を通して子どもたちに周知したところです。

忘れ物をした時の「しまった」という後悔と「困った」という経験。その経験を、「今度からもっと確認しよう」「忘れずにメモを取ろう」という成長のチャンスにしてほしいと願います。一つ間違えると、親から届けてもらうことを期待して、「なんで持ってきてくれなかったの！」と親を責めることにもなりかねません。以前勤務した学校で、宿泊教室の時、忘れ物をした子が、「もう！お母さんが入れ忘れた！」と怒りながらバッグの中を探している場面に出くわし、唖然としたことがあります。

右の「子育て四訓」では、小学生の時期は「三」に当たるかと思います。「徐々に手を離していき、目を離さない」時期。つまり、自律を促し、多少の苦労や後悔、落ち込む経験を通して、たくましさや、その場での状況判断と解決力、経験をプラスに変える力などを育んでほしいと願います。

保護者の方の事務室への「忘れ物届け」も多いと聞きます。時と場合の状況次第かと思いますが、自律を促す意味でも、成長の段階に応じて「自分の責任のもと、忘れ物がないか自分で確かめる」ことについて、ご家庭で話題にしていただければ幸いです。

子育て四訓

一、乳児はしっかり、肌を離すな
二、幼児は肌を離せ、手を離すな
三、少年は手を離せ、目を離すな
四、青年は目を離せ、心を離すな